一杯のラーメンで生きる勇気をもらいました

王将フードサービス社長　渡邊直人（わたなべ　なおと）

忘れもしない2011年3月18日、春とは名ばかりの底冷えする宮城県。餃子の王将仙台六丁の目店で、私は炊き出しで野菜煮込みラーメンを提供していた。それを食べ終えた70歳過ぎとおぼしき女性が私の目をみつめ、涙ながらに言った言葉である。

聞くところによると女性は3月11日の東日本大震災で家も家族も流され、「なぜ私だけが生き残ったのか」と生きる意味を見失っていたのだそうだ。避難所から店まで歩いてくるのにも相当ご苦労があったと思うが、何かに導かれたように来店され、野菜煮込みラーメンを残さず食されたのだ。女性の言葉はさらに、「熱々のラーメンを食べたら、『ああ、私は生かされたのだ。生きていてよかった』と思えるようになりました。ありがとうございました」と続いた。

一杯のラーメンが命を繋いだ

女性の言葉から私の価値観も変わった。

この時私は「食」を生業としていて本当によかったと思うと同時に一生の仕事にしていこうと一層強く心に決めた。また、限られた時間を大切に生きていこうと誓った。

当時、炊き出しを行っている従業員にも被災している者がおり、応援に駆け付けた者も連日寝袋で寝食もままならない生活を送っていた。また、食材の確保も容易なことではなかったが、全社一体となり取り組んだ。私だけでなく、従業員がいただいた「ありがとう」の言葉は、私達の行動が避難生活を余儀なくされた方々のお役に立てているというやりがいや喜びとなった。このことは何事にも代え難い体験として今の餃子の王将の原点となっている。

日常の当たり前が当たり前でなくなった時でも空腹はやって来る。むしろそのような時こそ支えとなるのが「食べること」であり、食べることが生きるモチベーションになっているように思う。

コロナ禍により、制約が多くなった生活に多少の不自由は感じるものの、食べたい時に食べることができ、それをおいしいと感じられることはありがたく、幸せであると思う。

先行きの見えない時代ではあるが、人が食すること、食することで心が満たされることは普遍的である。

「食」の最前線にいる私は、これからも社員と一丸となって「食」を通じて社会に貢献し、一人でも多くの方々の「生きる喜び」を創出していきたい。